Relation of Assertion to Interpersonal Affects and Interpersonal Needs

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/27237

アサーションと対人感情・対人欲求との関連

原田　克巳，　青山　智恵*

Relation of Assertion to Interpersonal Affects and Interpersonal Needs

Katsumi HARADA, Chie AOYAMA

問　題　と　目　的

近年若者のコミュニケーションの希薄さが指摘されている（岡田，1995;中村，2000）。大坊（2005）は，コミュニケーション不全の状況において,適応的な関係を築き維持していくには,以前にも増して意図的な努力が必要であると述べている。そしてその上で,他者との関係やコミュニケーションを円滑にする技能である「社会的スキル」を高める試みが幅広く実践されることは社会の要請に沿うものであるとしている。また石井(2006)は，多くの研究において社会的スキルは様々な社会的適応と関連することや,よりよい社会生活の必要条件であることが主張されていると指摘している。

社会的スキルを構成する要素は研究者により様々な定義がなされている（安藤・石原，2003)。例えば,和田(1991)は「関係開始」「関係維持」「自己主張」の3つを，また大坊(1998)は「コミュニケーション」「察知・推測」「対人認知・状況理解」「自己表現」「対人関係の調整」「社会そして組織にある文化規範・規則」「個人属性」の７つを挙げている。このように社会的スキルを構成するとされる要素についての捉え方には様々な考えがあるが,和田(1991)の「自己主張」は大坊(1998)でいうところの「対人関係の調整」に該当するものであり,両者は主張性という概念で共通している。また濱口（1994)は主張性および主張的行動を社会的スキルの代表的な行動であると指摘しており，社会的スキルを構成する全体的要素がどのようなものであるかにかかわらず，主張性，つまり自己表現のあり方は社会的スキルの重要な要素の一つであるとの認識は共通していると考えられる。

平木（1993）は自己表現を，①非主張的な自己表現,②攻撃的な自己表現,③アサーティブな自己表現の3つに分類している。非主張的な自己表現とは,自分の考えや信念を表現しなかったり,相手に伝わりにくい曖昧な言い方をしたりする表現の仕方であり，自分よりも他者を常に優先し自分のことを後回しにする自己表現のあり方である。攻撃的な自己表現とは,自分の意見や考え,気持ちをはっきり言うことで自由に自己主張してはいるが,相手の言い分や気持ちを無視あるいは軽視して,結果的に相手に自分を押し付ける態度や言動のことを指し，自分のことだけを考えて他者を踏みにじる自己表現のあり方である。そして,アサーティブな自己表現とは，言いたいことを我慢したり相手を攻撃したりするのではなく,自分の思っていることを率直に相手に伝えようとする態度であり，また同時に自分が発言した後に相手の意見や反論を聞く姿勢を持っている,相互理解を目指すコミュニケーションスタイル，つまり自分も他者も大切にした自己表現である。

廣岡・廣岡(2004)は，この相互尊重を根幹に置くアサーションの概念を理解し習得できれば,日常のコミュニケーション場面において,自己表明の仕方や自分の行動について相互尊重の視点から思考が促され,より容易に良好な人間関係を築

平成22年10月1日受理
* 金沢大学教育学部平成19年度卒業生

く方向に作用すると述べており，実際アサーションの概念を理解し習得することを目指したアサーション・トレーニングは，現在児童や生徒の対人関係能力を育む実践として多くの学校現場においても導入されつつある(黒木・夏野，2000など)。以上のように，アサーティブな自己表現は人間関係を良好に維持するために獲得が期待される重要なものであると言え，アサーションに関する研究は実践への応用の観点からも重要なものであると言える。

アサーションの程度を量的に測定する試みとして，柴橋（1998）はそれまでの主張性尺度研究の課題点を整理し，主張性は自己表現と他者表現の受けとめ方の二つの側面から捉える必要があると指摘し，「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の二つの尺度を作成している（柴橋，2001）。相互理解，相互尊重の態度がアサーティブな自己表現の重要な性質であることを考えれば，この2側面からアサーションを測定することは適切であると思われる。しかしながら柴橋（2001）は，自己表明をする他者，自分への表明を期待する他者を「友だち」と一義的に定めて，中学生，高校生のアサーションを検討している。中学生や高校生にとって友だちという言葉は親密で良好な関係性にある者もそうでない者も含めて捉えられる可能性のある言葉であり，相手が好意的な感情をいただいている友だちか否定的な感情を抱いている友だちかによるアサーションの検討は行っていない。玉瀬・馬場（2003）は，日本人は相手との心理的距離に応じて行動を変える傾向があると言えると指摘しており，同一人物においても他者との関係性によってアサーションに関わる態度や気持ちの程度に違いが見られるのではないかと予想されるため，肯定的に捉えている他者に対するアサーションと否定的に捉えている他者に対するアサーションについて，同一人物で違いが見られるかどうかを検討することは意義があると考えられる。

他者との関係性を考慮したアサーションに関する研究として，阿部（2007）の研究が上げられる。阿部(2007)は，柴橋（2001）の二つの尺度を用い，自己主張（「自己表明」尺度）と他者受容（「他者の表明を望む気持ち」尺度）のそれぞれの得点の高低の組み合わせによってアサーションの類型を4つに分け，どの類型がもっとも適応的であるかを検討するとともに，自己主張と他者受容がともに高い群（HH群）と自己主張と他者受容がともに低い群（LL群）の2群について，Bower & Bower（2000)によるDESCに基づいて作成した6つの分析コードの合計得点をアサーション行動得点とし，ジレンマ場面での相手の親しさの違いと状況の深刻さの違いによるアサーション行動の表出の差を実験的に検討している。阿部（2007）の結果では，HH群とLL群のどちらにおいてもアサーション行動得点に対する相手の親しさの影響は見いだされなかった。しかし，阿部（2007）は柴橋（2001）の二つの尺度によって測定されるアサーション自体は他者との関係性によって影響を受けるものとして見なしてはおらず，アサーション行動とは別のものとして扱って検討を行っている。確かに柴橋(2001)の尺度によって測定されるアサーションは態度や気持ちであり，実際的行動とは別次元のものであるが，態度や気持ち自体が他者との関係性によって変化する可能性は否定しきれない。したがって，本研究においてはアサーティブな態度や気持ちの程度が，好意的に捉えている他者と否定的に捉えている他者とによって異なるかどうかを，柴橋（2001）の尺度を用いて検討することとする。

またアサーティブな態度や気持ちが他者をどのように捉えているかによって異なるとすれば，他者をどのように意識し，他者に対してどのような欲求を抱いているかによっても異なることが予想される。対人欲求には様々なものがあるが，アサーティブな自己表現が自分も他者も大事にした表現の仕方であり，他者にどのように自らの表現が受け止められるかを意識した表現のあり方であることを考えると，公的自意識に

関わる対人欲求のありようがアサーティブな態度や気持ちの持ちように関連しているのではないかと考えられる。菅原(1986)は,公的自意識の強い人の対人欲求には他者から「賞賛されたい欲求」と「拒否されたくない欲求」が存在するとしている。さらに渡部（1999）は対人態度の背景にはこれら二つの欲求に加えて「他者との関係を回避する欲求」の存在を指摘している。そして渡部(1999)は，社会的スキルが高いと認知している人は他者から賞賛されたい欲求が強く，逆に社会的スキルが低いと認知している人は他者との関係を回避する欲求が強く,他者から拒否されたくない欲求を持つ人はその中間に位置すると報告している。アサーションが社会的スキルの重要な要素の一つであると考えられることからも，これらの対人欲求のあり方がアサーションに対する影響要因として働いていると考えられる。

そこで本研究では，他者から賞賛されたい欲求，他者との関係を回避する欲求,また他者から拒否されたくない欲求の3つの対人欲求が，アサーションの促進要因もしくは抑制要因として機能しているかどうかも検討を行うこととする。

方　法

調査対象者：A大学に通う大学生454名(男子238名,女子216名)

調査方法：質問紙調査。授業時間を利用しての一斉調査および個別依頼による調査を行った。

調査時期：2007年11月中旬。

調査内容：肯定的他者に対するアサーションを尋ねる質問，否定的他者に対するアサーションを尋ねる質問，対人欲求を尋ねる質問から構成。反応形式は全ての尺度で「全くあてはまらない」(1点)から「とてもあてはまる」(4点）の4件法とした。各質問の構成は以下の通りである。

(1) 肯定的他者に対するアサーション

柴橋(2001)が作成した「自己表明」尺度,「他者の表明を望む気持ち」尺度を使用した。肯定的感情を抱く他者に対してのアサーションを測定するため「同性の好きな人を思い浮かべて下さい」という教示文を加え,またその教示に合うように柴橋(2001)の項目で「友だち」とされていた表現を「その人」と変更した。なお,柴橋(2001)の自己表明尺度に含まれる「みんなと違う考えを持っていても言わずにまわりに合わせる」という項目は，本研究における場面設定においては回答不可能となるため削除し，自己表明尺度25項目,他者の表明を望む気持ち尺度18項目，全43項目を採用した。

(2) 否定的他者に対するアサーション

肯定的他者に対するアサーションを問う項目群と同じものを使用。ただし否定的感情を抱く他者に対してのアサーションを測定するため，教示文は「同性の嫌いな人を思い浮かべて下さい」に変更した。

(3) 対人欲求

渡部(1999)による対人欲求尺度（賞賛尺度，非拒否尺度，回避尺度からなる）を用いた。

結　果

（1）尺度の検討

①自己表明

肯定的他者に対する自己表明および否定的他者に対する自己表明それぞれについて，尺度の因子構造を明らかにするために因子分析（最尤法,プロマックス回転）を行った。

自己表明尺度について柴橋（2001）は「限界・喜びの表明」「意見の表明」「不満・要求の表明」「断りの表明」の4因子を見いだしているが，固有値の推移，因子負荷量の大きさ，解釈のしやすさを総合的に判断すると，本研究においては2因子解が妥当であると考えられた。また，肯定的他者に対する自己表明と否定的他者に対する自己表明の両尺度がともに同じ因子構造をもつように項目を選別し，最終的にそれぞれ同じ11項目を削除した14項目2因子解を適当と判断し

た（Table 1，Table 2）。

肯定的他者に対する自己表明も否定的他者に対する自己表明も，第1因子はどちらも同一の7項目からなり，意見の表明や不満の表明を捉える項目群から構成されているため「意見・不満の表明」と命名した。第2因子も肯定，否定どちらも同一の7項目からなり，肯定的感情の表明や個人的な限界の表明を捉える項目群から構成されているため「喜び・限界の表明」と命名した。

なお各因子について Cronbach のα係数を算出したところ，肯定的他者に対する自己表明の第1因子はα＝.745,第2因子はα＝.750，否定的他者に対する自己表明の第1因子はα＝.840，第2因子はα＝.738であり，それぞれ十分な内的一貫性を有していることが確認された。

②他者の表明を望む気持ち

肯定的他者に対する他者の表明を望む気持ち（以後「肯定的他者に対しての表明を望む気持ち」と表記）および否的的他者に対する他者の表明を望む気持ち（以後「否定的他者に対しての表明を望む気持ち」と表記）それぞれについて，尺度の因子構造を明らかにするために因子分析（最尤法,プロマックス回転）を行った。

柴橋（2001）は他者からの表明を望む気持ちについて，「相談・依頼を望む気持ち」「率直な断りを望む気持ち」「率直な抗議・注意を望む気持ち」「独自な意見の表明を望む気持ち」の4因子を見いだしているが，固有値の推移，因子負荷量の大きさ，解釈のしやすさを総合的に判断すると，本研究においては2因子解が妥当であると考えられた。また，肯定的他者に対して望む表明と否定的他者に対して望む表明の両尺度がともに同じ因子構造をもつように項目を選別し，最終的にそれぞれ同じ3項目を削除した15項目2因子解を適当と判断した（Table 3，Table 4）。

肯定的他者に対しての表明を望む気持ちも否定的他者に対しての表明を望む気持ちも，第1因子はどちらも同一の9項目からなり，意見や注意の表明，率直な断りの表明を望むことを捉える項目群から構成されているため「断り・注意・意見を望む気持ち」と命名とした。第2因子も肯定，否定どちらも同一の6項目からなり，相談や依頼の表明を望むことを捉える項目群から構成されているため「相談・依頼を望む気持ち」と命名した。

なお，各因子についてCronbachのα係数を算出したところ，肯定的他者に対して望む表明の第1因子はα＝.911,第2因子はα＝.844，否定的他者に対して望む表明の第1因子はα＝.925，第2因子はα＝.886であり，それぞれ十分な内的一貫性を有していることが確認された。

③対人欲求

因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行ったところ，渡部（1999)と同様の因子構造を得たが，因子負荷量の低い項目があったため，該当の1項目を削除し，25項目からなる3因子解を適当と判断した（Table 5)。

第1因子は他者からの賞賛を得たいという欲求を捉える項目群から構成されるため「賞賛欲求」，第2因子は他者から拒否されたくないという欲求を捉える項目群から構成されるため「非拒否欲求」，第3因子は他者との関係を回避したいという欲求を捉える項目群から構成されるため「回避欲求」と命名した。

各因子についてCronbachのα係数を算出したところ，第1因子はα＝.925,第2因子はα＝.839と十分な数値が得られ,内的一貫性を有していることが確認された。しかしながら第3因子はα＝.642と必ずしも十分な内的一貫性があるとは言えない数値であったため，以後の分析からは除外することとした。

Table 1 肯定的他者に対する自己表明（最尤法，プロマックス回転）

質問項目	I	II
（第1因子　意見・不満の表明　α=.745）		
15.その人の行動が自分にとって迷惑だと思うときはその人にやめてと言う	**0.731**	-0.199
12.分担した仕事をしようとしないときはその人にはっきり注意する	**0.596**	0.039
25.その人がまわりに迷惑な行動をしているときは、はっきり注意する	**0.584**	0.034
18.その人のしていることに不満を感じたときはその気持ちをその人に言う	**0.576**	0.007
24.その人の考えに賛成できないとき「私はそうは思わない」とはっきり言う	**0.558**	0.037
5.その人の無神経な言い方で傷ついたときは自分の気持ちをはっきり言う	**0.405**	0.138
21.貸したものをいつまでも返してくれないときは、その人に返してとはっきり言う	**0.357**	0.061
（第2因子　喜び・限界の表明　α=.750）		
10.その人に褒められて嬉しいときはその気持ちを素直に表す	-0.117	**0.704**
11.その人のしたことがいいなと思ったときはその気持ちを言葉で表す	-0.035	**0.684**
19.どうしていいか分からないことがあって困ったときはその人に相談する	0.013	**0.562**
4.辛いときや苦しいときはその気持ちをその人に伝える	0.082	**0.521**
1.おもしろいことや感動したことがあったときその人にその気持ちを伝える	0.012	**0.504**
17.その人に強く言いすぎて悪かったと思ったときはその気持ちを伝える	0.118	**0.357**
7.一人では出来ないようなことで困っているときは，手伝ってとその人に頼んでみる	0.298	**0.334**
因子間相関　I	-	
II	0.405	-

Table 2 否定的他者に対する自己表明（最尤法，プロマックス回転）

質問項目	I	II
（第1因子　意見・不満の表明　α=.840）		
15.その人の行動が自分にとって迷惑だと思うときはその人にやめてと言う	**0.732**	-0.146
18.その人のしていることに不満を感じたときはその気持ちをその人に言う	**0.704**	0.119
25.その人がまわりに迷惑な行動をしているときは、はっきり注意する	**0.702**	-0.002
24.その人の考えに賛成できないとき「私はそうは思わない」とはっきり言う	**0.695**	-0.086
12.分担した仕事をしようとしないときはその人にはっきり注意する	**0.668**	0.082
21.貸したものをいつまでも返してくれないときは、その人に返してとはっきり言う	**0.560**	-0.085
5.その人の無神経な言い方で傷ついたときは自分の気持ちをはっきり言う	**0.545**	0.160
（第2因子　喜び・限界の表明　α=.738）		
11.その人のしたことがいいなと思ったときはその気持ちを言葉で表す	0.030	**0.727**
10.その人に褒められて嬉しいときはその気持ちを素直に表す	-0.097	**0.712**
17.その人に強く言いすぎて悪かったと思ったときはその気持ちを伝える	0.060	**0.525**
1.おもしろいことや感動したことがあったときその人にその気持ちを伝える	-0.092	**0.496**
7.一人では出来ないようなことで困っているときは，手伝ってとその人に頼んでみる	0.105	**0.468**
4.辛いときや苦しいときはその気持ちをその人に伝える	0.030	**0.393**
19.どうしていいか分からないことがあって困ったときはその人に相談する	-0.029	**0.362**
因子間相関　I	-	
II	0.139	-

Table 3 肯定的他者に対しての表明を望む気持ち（最尤法，プロマックス回転）

質問項目	I	II
（第1因子　断り・注意・意見を望む気持ち　α=.911）		
12.私がしたことで嫌な気持ちがしたときはそう言ってほしいと思う	**0.910**	-0.119
11.私が頼んだことでもやりたくないときははっきりそう言ってほしいと思う	**0.869**	-0.102
9.私が言った言葉で腹が立ったり不愉快になったときは、そう言ってほしいと思う	**0.837**	-0.077
10.私の行動がその人にとって迷惑なときはそう言ってほしいと思う	**0.747**	0.057
17.私の意見に賛成できないと思ったときは自分の考えを言ってほしいと思う	**0.572**	0.182
2.私の無神経な言い方で傷ついたときはそう言ってほしいと思う	**0.568**	0.192
16.私から頼まれたことが出来ないときははっきりそう言ってほしいと思う	**0.549**	0.143
15.私が誘ったときもし都合が悪ければ、無理して付き合わないでそう言って断ってほしいと思う	**0.527**	0.088
14.分担した仕事を私がしていないと思ったときはそう言ってほしいと思う	**0.497**	0.293
（第2因子　相談・依頼を望む気持ち　α=.844）		
18.その人が辛いときや苦しいときは私にそう言ってほしいと思う	-0.074	**0.822**
7.その人にとって嬉しいことがあったときはその気持ちを伝えてほしいと思う	-0.126	**0.750**
1.困っているときや何か手伝ってほしいことがある時は言ってほしいと思う	0.044	**0.686**
3.一人で出来ないことで困っているときは「手伝って」と言ってほしいと思う	0.172	**0.616**
13.私に迷惑がかかりそうなことでも困っているときは頼んでみてほしいと思う	0.252	**0.473**
8.私と考え方が違うと思っても話し合ったり議論してほしいと思う	0.278	**0.403**
因子間相関　I	-	
II	0.714	-

Table 4 否定的他者に対しての表明を望む気持ち（最尤法，プロマックス回転）

質問項目	I	II
（第1因子　断り・注意・意見を望む気持ち　α=.925）		
11.私が頼んだことでもやりたくないときははっきりそう言ってほしいと思う	**0.893**	-0.057
16.私から頼まれたことが出来ないときははっきりそう言ってほしいと思う	**0.834**	-0.263
15.私が誘ったときもし都合が悪ければ、無理して付き合わないでそう言って断ってほしいと思う	**0.824**	-0.225
12.私がしたことで嫌な気持ちがしたときはそう言ってほしいと思う	**0.734**	0.185
17.私の意見に賛成できないと思ったときは自分の考えを言ってほしいと思う	**0.717**	-0.001
10.私の行動がその人にとって迷惑なときはそう言ってほしいと思う	**0.678**	0.199
14.分担した仕事を私がしていないと思ったときはそう言ってほしいと思う	**0.638**	0.160
9.私が言った言葉で腹が立ったり不愉快になったときは、そう言ってほしいと思う	**0.636**	0.261
2.私の無神経な言い方で傷ついたときはそう言ってほしいと思う	**0.473**	0.411
（第2因子　相談・依頼を望む気持ち　α=.886）		
1.困っているときや何か手伝ってほしいことがある時は言ってほしいと思う	-0.137	**0.899**
3.一人で出来ないことで困っているときは「手伝って」と言ってほしいと思う	0.032	**0.820**
13.私に迷惑がかかりそうなことでも困っているときは頼んでみてほしいと思う	-0.121	**0.800**
18.その人が辛いときや苦しいときは私にそう言ってほしいと思う	-0.087	**0.784**
7.その人にとって嬉しいことがあったときはその気持ちを伝えてほしいと思う	-0.047	**0.743**
8.私と考え方が違うと思っても話し合ったり議論してほしいと思う	0.172	**0.551**
因子間相関　I	-	
II	0.625	-

Table 5 対人欲求尺度（最尤法，プロマックス回転）

質問項目	I	II	III
（第1因子　賞賛欲求　α=.889）			
6.有能な人間だと，まわりから認められたい	**0.745**	−0.092	0.139
10.みんなから尊敬される人になりたい	**0.722**	−0.037	0.047
5.人に自分を印象づけたい	**0.711**	−0.022	−0.152
3.何か気の利いたことを言って人を感心させたい	**0.683**	0.024	0.172
8.みんなの注目をあびたい	**0.682**	0.001	−0.099
2.みんなの人気者になりたい	**0.682**	0.029	−0.101
4.自分の得意なこと（勉強・スポーツなど）をまわりの人にみてもらいたい	**0.675**	−0.043	0.062
9.社会で高く評価されるようなことをしたい	**0.674**	−0.034	0.078
1.人前ではいつもかっこよくありたい	**0.595**	0.027	0.091
26.みんなに喜んでもらえる素晴らしいことをしたい	**0.475**	0.216	−0.186
（第2因子　非拒否欲求　α=.839）			
16.出来るだけ敵は作りたくない	−0.027	**0.776**	−0.118
7.どんなときでも相手の機嫌を損ねたくない	0.000	**0.665**	0.090
15.自分がしたいように行動するよりも，周囲の人から好まれるように行動したい	0.036	**0.660**	−0.014
12.誰からも嫌われたくない	0.145	**0.642**	0.028
13.人の感情を害しないかと心配なので，他の人の言うことに強く反論することはしたくない	−0.103	**0.603**	0.252
18.自分の考えよりも自分の所属する集団の和を優先させたい	−0.042	**0.580**	−0.051
20.自分を変える努力をしてでも周囲の人と上手くやっていきたい	0.076	**0.533**	−0.178
14.人の批判めいたことはあまり言いたくない	−0.059	**0.527**	0.015
17.みんなから変な人だと思われたくない	0.008	**0.428**	0.067
19.例えば人から批判される可能性の高いいざこざのような場面には、最初からなるべく近づきたくない	−0.078	**0.380**	0.246
（第3因子　回避欲求　α=.642）			
11.人と深く関わるほど自分の嫌な部分を相手に知られそうで，積極的に人と深く関わりたいとは思わない	−0.089	−0.045	**0.659**
23.人からの拒否や批判を避けるためには，たとえ人とあまり関わることが出来なくなってもしょうがない	−0.019	−0.064	**0.533**
21.断られるのが心配なので，誰かに頼み事をあまりしたくない	0.018	0.131	**0.494**
24.一緒にどこかに行こうと誘って断られたら，もう一度誘ってみる気にならない	0.140	−0.007	**0.456**
25.自分を嫌っている人とはなるべく顔を合わせたくない	0.206	0.062	**0.321**
因子間相関　I	−		
II	0.332	−	
III	−0.120	0.313	−

④下位尺度得点の算出

肯定的他者に対する自己表明の「意見・不満の表明」「喜び・限界の表明」,否定的他者に対する自己表明の「意見・不満の表明」「喜び・限界の表明」，肯定的他者に対しての表明を望む気持ちの「断り・注意・意見の表明を望む気持ち」「相談・依頼の表明を望む気持ち」，否定的他者に対しての表明を望む気持ちの「断り・注意・意見の表明を望む気持ち」「相談・依頼の表明を望む気持ち」,対人欲求の「賞賛獲得欲求」「拒否回避欲求」の10因子それぞれについて，各因子の項目を単純加算し,項目数で除した平均値を算出し，それらを尺度得点とした。

（2）アサーションに対する対人感情の違いと性別の効果の検討

自分が自己表明をする相手もしくは自分に対して表明をしてくる相手が，自分が肯定的感情を抱いている相手であるか，否定的感情を抱いている相手であるかによって，また性別によっても「意見・不満の表明」「喜び・限界の表明」「断り・注意・意見の表明を望む気持ち」「相談・依頼の表明を望む気持ち」の程度に差が見られるかどうかを検討するため，対人感情（2）×性別（2）の

二要因分散分析を行った（Table 6）。

その結果，意見・不満の表明以外のアサーション下位尺度すべてにおいて対人感情の違いによる主効果が見られ，それらにおいては肯定的感情を抱いている他者に対してのアサーションの方が，否定的感情を抱いている他者に対するアサーションに比べて，高い得点を示した（Figure 1）。

また，アサーション下位尺度すべてにおいて性別の主効果が見られ，意見・不満の表明は男子の方が女子に比べて高い得点を示し，その他においては女子の方が男子に比べて高い得点を示した（Figure 2）。

下位尺度ごとに結果をまとめると，まず意見・不満の表明においては，性別の主効果のみが見られた（$F(1,450)=4.33$, $p<.05$）。つまり，相手に対して肯定的感情を抱いていようが否定的感情を抱いていようが，それによって意見や不満を伝える程度に差は生じることはないが，男子の方が女子に比べて意見や不満を伝える姿勢がより強いということであった。

また，喜び・限界の表明においては，性別の主効果（$F(1,451)=58.40$, $p<.01$）とともに，対人感情の違いの主効果も見られた（$F(1,451)=1255.19$, $p<.01$）。つまり，男子に比べて女子の方が喜びや限界について表明をする姿勢がより強く，また肯定的感情を抱いている相手に対しての方が，否定的感情を抱いている相手に比べて，より喜びや限界の気持ちを伝える姿勢が強いということであった。

断り・注意・意見の表明を望む気持ちにおいては交互作用が見られた（$F(1,451)=4.19$, $p<.05$）。そのため単純主効果の検定を行ったところ，男子女子両方において対人感情の単純主効果が有意であり（男子：$F(1,451)=197.25$, $p<.01$；女子：$F(1,451)=110.74$, $p<.01$），また各対人感情においても性別の単純主効果が有意であった（肯定的他者：$F(1,451)=17.66$, $p<.01$；否定的他者：$F(1,451)=26.50$, $p<.01$）。つまり，男子においても女子においても，否定的他者に対してよりも肯定的他者に対する断り・注意・意見の表明を望む気持ちが強く，なおかつ対人感情が肯定的である場合も否定的である場合も女子の方が男子に比べてより断り・注意・意見の表明を望む気持ちを強く持っているということであった。

また，相談・依頼の表明を望む気持ちにおいては，性別の主効果（$F(1,452)=40.03$, $p<.01$）とともに，対人感情の違いの主効果も見られた（$F(1,452)=1029.96$, $p<.01$）。つまり，相手に対する感情がどのようなものであるかは問わず，女子の方が男子に比べて相手に対してより相談や依頼をもちかけて欲しいという気持ちが強いということであり，また男女を問わず，否定的感情を抱いている他者に比べて肯定的感情を抱いている他者の方に対して，相談や依頼をもちかけて欲しいという気持ちがより強くあるということであった。

Table 6 自己表明と他者からの表明を望む気持ちの程度についての対人感情の違いと性別による差

対人感情	肯定的		否定的		主効果（F値）				交互作用	
性別	男子	女子	男子	女子	対人感情		性別		(F値)	
意見・不満の表明	2.757	2.648	2.696	2.628	2.359		4.328	*	.614	
喜び・限界の表明	2.881	3.164	1.934	2.125	1255.188	**	58.403	**	2.735	
断り・注意・意見の表明を望む気持ち	3.186	3.370	2.560	2.876	299.398	**	34.792	**	4.194	*
相談・依頼の表明を望む気持ち	3.046	3.343	1.926	2.118	1029.962	**	40.033	**	2.087	

**$p<.01$, *$p<.05$

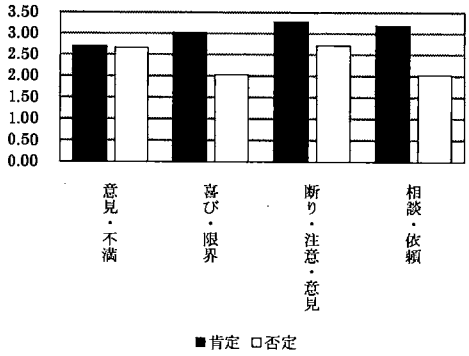

Figure 1 アサーションの下位尺度得点（対人感情の違い別）

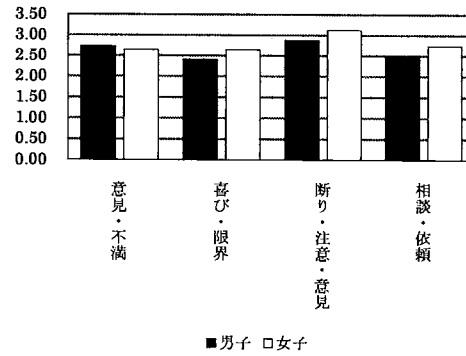

Figure 2 アサーションの下位尺度得点（性別）

（3）アサーションに対する対人欲求の効果の検討

まず，賞賛欲求と非拒否欲求の影響を検討するため，それぞれについて平均点を基準に上下2群に分割し，平均点より低い得点を示す群を低群，高い得点を示す群を高群とした。そして，肯定的他者および否定的他者それぞれに対する「意見・不満の表明」「喜び・限界の表明」「断り・注意・意見の表明を望む気持ち」「相談・依頼の表明を望む気持ち」について，男女別々に賞賛欲求（2）×非拒否欲求（2）の二要因分散分析を行った。

男子における二要因分散分析の結果は Table 7 に示すとおりである。

まず，肯定的他者に対する自己表明，肯定的他者に対しての表明を望む気持ちについては，すべてについて賞賛欲求の主効果が見られ，賞賛欲求高群の方が低群に比べて平均値が高かった（Figure 3）。また，意見・不満の表明については非拒否欲求の主効果も見られ（$F(1,232)=11.19, p<.01$），非拒否欲求低群の方が高群に比べて平均値が高かった（Figure 4）。

Table 7 アサーションと対人欲求（男子）

	賞賛欲求	低群		高群		主効果（F値）		交互作用
	非拒否欲求	低群	高群	低群	高群	賞賛	非拒否	（F値）
肯定的他者	意見・不満の表明	2.722	2.609	3.017	2.734	12.656 **	11.192 **	2.064
	喜び・限界の表明	2.745	2.780	3.048	3.013	20.127 **	.000	.338
	断り・注意・意見の表明を望む気持ち	3.042	3.122	3.310	3.308	12.817 **	.382	.419
	相談・依頼の表明を望む気持ち	2.825	2.943	3.258	3.226	26.960 **	.391	1.197
否定的他者	意見・不満の表明	2.568	2.560	2.944	2.798	14.125 **	.884	.714
	喜び・限界の表明	1.870	1.960	1.960	1.956	.459	.456	.547
	断り・注意・意見の表明を望む気持ち	2.513	2.591	2.615	2.535	.061	.000	.723
	相談・依頼の表明を望む気持ち	1.904	1.883	2.000	1.913	.515	.378	.145

** $p<.01$

つまり，自分が肯定的な感情を抱いている他者に対しては，人から賞賛されたいという欲求を強く持っている男子は，そうでない男子に比べて，意見や不満，喜びや限界の表明をより多く行い，また相手に対しても断りや注意，意見の表明や，相談，依頼の表明を望む気持ちをより強く持っているが，人から拒否されたくないという欲求を強く持っている男子は，そうでない男子に比べて，意見や不満の表明をしないという結果であった。

一方，否定的感情を抱いている他者に対しては，意見・不満の表明についてのみ賞賛欲求の主効果が見られ（$F(1,232)=14.13, p<.01$），賞賛欲求高群の方が低群に比べて平均値が高かった（Figure 5）。つまり，自分が嫌いに感じている他者に対しては，人から賞賛されたいという欲求を強く持っている男子は，そうでない者に比べて，意見や不満の表明をより多く行うという結果であった。否定的他者に対しての表明を望む気持ちについては，非拒否欲求による差は見られないということであった（Figure 6）。

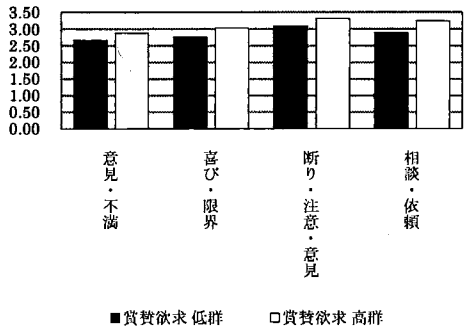

Figure 3 肯定的他者に対するアサーション（賞賛欲求）

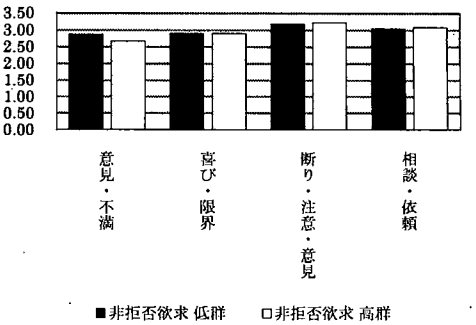

Figure 4 肯定的他者に対するアサーション（非拒否欲求）

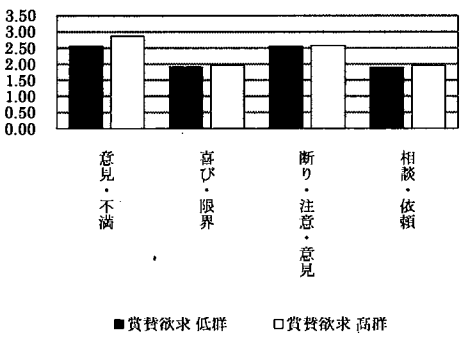

Figure 5 否定的他者に対するアサーション（賞賛欲求）

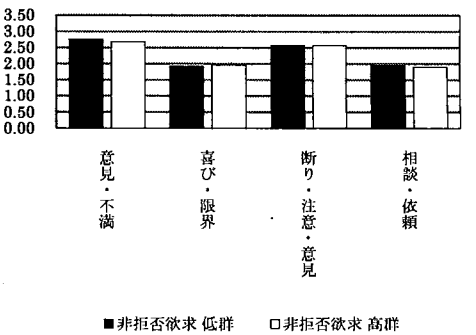

Figure 6 否定的他者に対するアサーション（非拒否欲求）

女子における二要因分散分析の結果は Table 8 に示すとおりである。

まず，肯定的感情を抱いている他者に対する自己表明，肯定的他者に対しての表明を望む気持ちについては，賞賛欲求による影響は見られず（Figure 7），意見・不満の表明についてのみ，

非拒否欲求の主効果が見られ（F(1,211)=18.23, p<.01），非拒否欲求低群の方が高群に比べ平均値が高かった（Figure 8）。つまり，自分が肯定的な感情を抱いている他者に対しては，人から拒否されたくないという欲求を強く持っている女子は，そうでない女子に比べて，意見や不満の表明をしないという結果であった。

Table 8 アサーションと対人欲求（女子）

	賞賛欲求	低群		高群		主効果（F値）		交互作用
	非拒否欲求	低群	高群	低群	高群	賞賛	非拒否	（F値）
肯定的他者	意見・不満の表明	2.758	2.473	2.795	2.615	2.724	18.233 **	.933
	喜び・限界の表明	3.099	3.131	3.249	3.194	3.265	.043	.542
	断り・注意・意見の表明を望む気持ち	3.365	3.364	3.433	3.337	.112	.634	.606
	相談・依頼の表明を望む気持ち	3.250	3.316	3.406	3.401	3.729	.237	.330
否定的他者	意見・不満の表明	2.701	2.402	2.890	2.622	6.366 *	12.218 **	.038
	喜び・限界の表明	2.132	2.158	2.000	2.159	1.366	2.709	1.423
	断り・注意・意見の表明を望む気持ち	2.901	2.931	2.821	2.844	.980	.099	.001
	相談・依頼の表明を望む気持ち	2.083	2.207	2.038	2.124	.631	1.676	.057

** $p<.01$, * $p<.05$

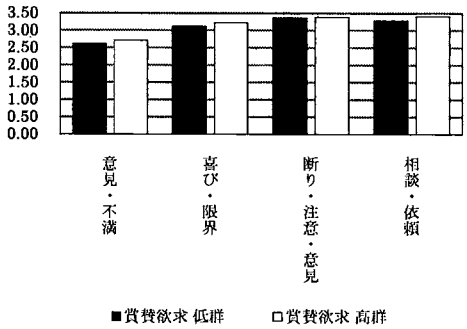

Figure 7 肯定的他者に対するアサーション（賞賛欲求）

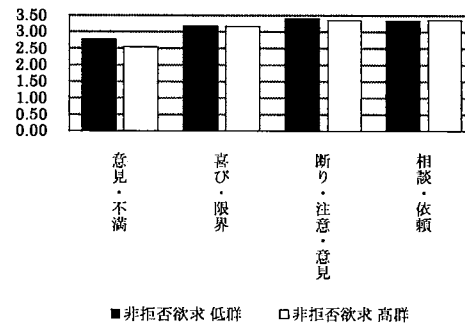

Figure 8 肯定的他者に対するアサーション（非拒否欲求）

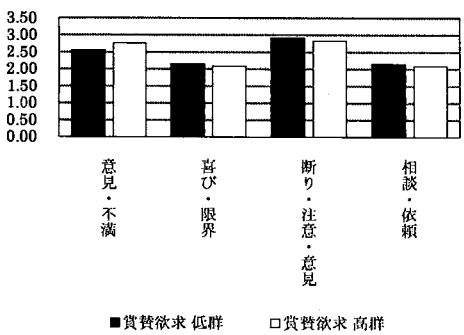

Figure 9 否定的他者に対するアサーション（賞賛欲求）

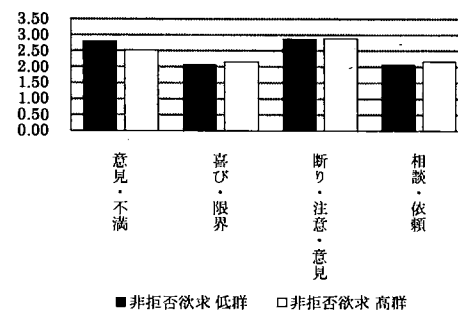

Figure 10 否定的他者に対するアサーション（非拒否欲求）

一方，否定的感情を抱いている他者に対しては，意見・不満の表明について賞賛欲求と非拒否欲求それぞれの主効果が見られ（賞賛：$F(1,209)=6.37$, $p<.05$; 拒否：$F(1,209)=12.22$, $p<.01$），賞賛欲求高群の方が低群に比べて平均値が低く，また非拒否欲求高群の方が低群に比べて平均値が高かった（Figure 9,Figure 10）。つまり，自分が嫌いに感じている他者に対しては，人から賞賛されたいという欲求を強く持っている女子は，そうでない女子に比べて，意見や不満の表明をより多く行うということであり，また人から拒否されたくないという欲求を強く持っている女子は，そうでない女子に比べて，意見や不満の表明をしないという結果であった。

考　察

（1）尺度構成について

アサーティブな態度や気持ちを測定する「自己表明」尺度，「他者の表明を望む気持ち」尺度であるが，本研究では探索的因子分析を行った結果，柴橋（2001）によって得られた4因子構造をどちらの尺度においても得ることはできず，それぞれ2因子解が妥当と判断された。同じ2尺度を用いた工藤・金子・池上・佐々木(2007)の研究においてもそれぞれ2因子解が採用されており，その内容は自己表明に関しては「意見・不満の表明」「嬉しさの表明」，他者の表明を望む気持ちに関しては「抗議・意見・断りを望む気持ち」「相談・依頼を望む気持ち」であり，本研究において採用した2因子解と類似している。意見や不満，注意や断りといった表明は自分や他者に対して否定的，攻撃的ともとれる種類の表明であり，喜びや限界の表明や相談や依頼を求める気持ちは自分や他者に対して肯定的，親和的ともとれる種類の表明であることから，本研究において2因子解が得られたことは解釈が可能である。

また本研究では肯定的他者に対するアサーションと否定的他者に対するアサーションの程度を単純に比較して検討できるように，両者の項目のまとまりが同一となるよう項目の取捨選択を行ってもいる。したがって，本研究ではアサーションに関係する態度や気持ちを網羅的に検討したとは言えない。総体的なアサーションの測定に関しては，構成概念を再検討し，より安定性の高い新たな測定尺度を作成することも考えられねばならないであろう。

（2）アサーションに対する対人感情の違いと性別の効果について

自己表明と他者に対しての表明を望む気持ちについて，自分が表明をする他者もしくは自分に表明をしてくる他者が，自分が肯定的感情を抱く相手であるか，否定的感情を抱く相手であるかによって差が見られるかどうかを，男子と女子で異なるかどうかも含めて検討を行った。

まず対人感情についてであるが，自らの喜びの気持ちや限界の表明をする態度と，自分に対して断りや注意，意見を言って欲しいと望む気持ちと自分に対して相談や依頼をして欲しいと望む気持ちは，肯定的感情を抱いている他者に対しての方が否定的感情を抱いている他者に対してよりも強いということが明らかとなった。意見や不満を表明することについては他者に対する対人感情が肯定的なものであれ否定的なものであれ差が見られないという結果ではあったが，アサーティブな態度や気持ちの持ちようは，表明をしたり表明を受けたりする相手に対する対人感情によって異なることが明らかとなったといえよう。

塙(1999)は，情動を表出することによって自分が感じた情動を相手に伝えることは，人と人との結びつきや繋がりとその性質と深く関連しており，対人関係を確立したり維持したりしていく上で非常に重要な機能を果たしていると述べている。好意的な感情を抱いている他者に対して自ら好意的な表現を行ったり，自分に対して遠慮のない表明をしてほしいと望んだりすることは，その相手と良い関係を築き維持してい

きたいと感じる関係では自然なことであると言える。また反対に,嫌悪的な対人感情は回避欲求や拒否欲求などと関連が強いと指摘されている(齋藤, 1990)。嫌いと感じる人に対しては表明に関する態度や気持ちが好きと感じる人に対してよりも低くなるという結果は妥当なものであるといえよう。

次に性別については，意見や不満を表明することについては女子に比べて男子の方が高い得点を示し，その他はすべて男子に比べて女子の方が高い得点を示す結果となった。

本研究における「意見・不満の表明」が柴橋（2001）における「意見の表明」と「不満・要求の表明」の項目が合わさったものとして構成されていることから，意見や不満を表明する態度を男子の方が女子に比べて強く持っているという結果は，柴橋（2001）において，「意見の表明」には性差が見られず「不満・要求の表明」で男子の方が女子に比べて有意に高い得点を示した結果と一致する。一方，喜びや限界を表明すること，及び自分にとって傷つきとなり得る断りや注意，意見といった表明を望むこと，自分への信頼が伺える相談や依頼をもちかけてもらうことを望むことについて，女子の方が男子に比べてより強い態度や気持ちを持っているという結果も，柴橋（2001）の結果と一致する。落合・佐藤（1996）は，女子は友人と理解し合い，共感し共鳴しあうといった，お互いが一つになるような関係を望んでいると指摘している。また榎本（1999）は，女子の青年期における友人関係は親密な関係を作ることが中心であり，女子は交流,共有を意識した友人との信頼感や,友人からどう思われているかについて男子より感じていると指摘している。本研究の結果はこれらの指摘を支持するものであると言える。またさらに，本研究では他者に対する好悪の感情に左右されず，男子に比べて女子の方がアサーティブな態度や気持ちをもっているということが明らかとなったことから，これまでの指摘について一層示唆を得る知見を得たといえよう。

（3）アサーションに対する対人欲求と性別の効果について

肯定的他者および否定的他者それぞれに対する「意見・不満の表明」「喜び・限界の表明」「断り・注意・意見の表明を望む気持ち」「相談・依頼の表明を望む気持ち」について，賞賛欲求と非拒否欲求の強さによって差が見られるかどうかを，男女別々に検討を行った。

その結果，男子と女子とで大きく異なる結果が得られた。

男子においては，肯定的他者についてはすべての下位尺度で賞賛欲求を強く持つ者の方が高い得点を示していた。つまり男子は，肯定的感情を抱く他者に対しては，他者から賞賛されたいという欲求を強く持っている男子の方が，そうでない男子に比べて，意見や不満，喜びや限界の気持ちを表明する態度をより強く持っており，また同様の表明を相手からしてくれることをより強く望んでいるという結果であった。菅原（1986）は，他者から賞賛されたい欲求の強い人は積極的に行動し他者の注目を集めることによって集団の中に自分の居場所や役割を確保しようとするのではないかと指摘している。注目を集めるための積極性が，肯定的他者と交わされる表明についても現れていると考えられる。

否定的他者については「意見・不満の表明」においてのみ賞賛欲求を強く持つ者の方が高い得点を示した。つまり，他者から賞賛されたいという欲求を強く持つ男子は，否定的感情を抱いている他者に対する意見や不満の表明の態度をより強く持っているということであった。小島・太田・菅原（2003）は，賞賛されたい欲求が強いと，自分の発言に対する周囲の評価が否定的であった場合，その評価の原因が自分の行動に帰属されるのではなく評価をもたらした他者や状況に帰属されやすく，怒りの感情を生じやすいと指摘している。意見や不満の表明は伝え方によっては攻撃的にもなる表明であると考

えられ，また本研究で否定的対人感情として扱った「嫌い」という感情は怒りの感情に結びつきやすいと考えられる。賞賛されたいという欲求を強く持っている男子は，自分が肯定的な感情を抱いている他者に対しては積極的で良好な表明のやりとりを行えるが，否定的な他者に対しては特に意見や不満を表明するような場面に接した際に怒りの感情が原動力となってその表明が促されるというということなのかもしれない。

なお，非拒否欲求の程度によって差が見られたのは肯定的他者に対する「意見・不満の表明」のみであり，人から拒否されたくないという欲求を強く持っている男子はそうでない男子に比べて肯定的な感情を抱く他者に対しては意見や不満の表明をしないという結果であった。菅原（1986）は，拒否されたくない欲求の強い者は，個性を殺し周囲との軋轢を最小限にすることによって集団の中に自分の居場所や役割を確保しようとすると述べている。また佐々木・菅原・丹野（2001）は，拒否回避欲求は対人不安傾向を促進する働きがあると指摘しており，清水（2007）も同様の指摘を行っている。対人不安を強く持つ者は，自分が好意的感情を抱く他者からの拒否は特に避けたいものであろう。三田村・横田（2006）は，拒否回避欲求は対人恐怖心性を介しても直接的にもアサーティブ行動を阻害すると示しておいる。したがって，相手に対して不快な思いをさせるかもしれない意見や不満の表明は抑制されたと考えられる。

次に女子においては，肯定的な感情を抱いている他者に対しても否定的な感情を抱いている他者に対しても，拒否されたくないという欲求を強く持つ女子の方がそうでない女子に比べて，意見や不満を表明しないということが明らかとなり，また否定的な感情を抱いている他者に対しての意見や不満の表明は，賞賛されたいという欲求を強く持っている女子の方がそうでない女子に比べて，より強い表明の態度を持っているということが明らかとなった。女子においては男子と異なって，この否定的他者への意見・不満の表明を除いて賞賛欲求の影響が見られず，また非拒否欲求についても「喜び・限界の表明」「断り・注意・意見の表明を望む気持ち」「相談・依頼を望む気持ち」においては影響が見られなかった。つまり，女子については，アサーティブな態度や気持ちの持ちようには，基本的には賞賛を得たいという欲求や拒否されたくないという欲求は関係しないということであった。しかしながら，肯定的他者に対する意見・不満の表明において非拒否欲求の効果が見られたことは，男子について述べたように，相手に対して不快な思いをさせるかもしれない意見や不満の表明が拒否されたくないという欲求によって抑制されたと考えられる。女子においては否定的他者への意見・不満の表明についても非拒否欲求の効果が示されている点で，女子は男子よりも友人との信頼感や，友人からどう思われているかについて感じているという榎本（1999）の指摘と合致しており，この拒否されたくないという欲求は重要なものであると言えよう。

まとめと今後の課題

以上のことから，アサーティブな態度や気持ちの持ちようは，交わされる表明の内容によって男子と女子とでその強さが異なり，また同一個人でも対象となる他者に対して肯定的な感情を抱いているか否定的な感情を抱いているかによってもその強さが異なることが明らかとなった。なおかつ，アサーティブな態度や気持ちの持ちようは，その個人が他者から賞賛されたいという欲求をどの程度持っているか，他者から拒否されたくないという欲求をどの程度持っているかによっても異なり，また男子と女子とではこれらの欲求のありようがアサーティブな態度や気持ちの持ちように与えある影響が大きく異なるということが示された。ただし，本研究においてはアサーションに関わる要因の影響を包括的に検討することは行っていない。関連要

因の包括的な検討は，実践場面においてアサーション・トレーニングをより効果的に実施するためにも望まれることであろう。そのためにも今後は，アサーションの構成概念を再整理するとともに，測定尺度の再検討を行い，アサーションに対する促進要因，抑制要因を包括的に扱ったモデルの検討を行うことが期待される。

引　用　文　献

阿部真由美　(2007)．大学生の友人関係におけるアサーション―「自己主張」と「他者受容」のバランス―　聖心女子大学大学院論集，**29**(1), 65-84.

安藤昌・石原金由　(2003)．対人ストレスと社会的スキルの関連について　児童臨床研究所年報，**16**, 90-99.

Bower, S. A., & Bower, G. H. (2000). *Asserting yourself*: A practical guide for positive change. Updated edition, Da Capo press.

大坊郁夫　(1998)．しぐさのコミュニケーション―人は親しみをどう伝えあうか―　サイエンス社

大坊郁夫　(2005)．社会的スキル向上を目指す対人コミュニケーション　ナカニシヤ出版

榎本淳子　(1999)．青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的変化　教育心理学研究，**47**, 180-190.

濱口佳和　(1994)．児童用主張性尺度の構成　教育心理学研究，**42**(4), 463-470.

塙朋子　(1999)．関係性に応じた情動表出―児童期における発達的変化―　教育心理学研究，**47**, 273-282.

平木典子　(1993)．アサーション・トレーニング―さわやかな＜自己表現＞のために―　日本・精神技術研究所

廣岡雅子・廣岡秀一　(2004)．中学生のコミュニケーション能力を高めるアサーション・トレーニングの効果―授業での実践的研究―　三重大学教育学部研究紀要，**55**, 75-90.

石井佑可子　(2006)．社会的スキル研究の現状と課題―「メタ・ソーシャルスキル」概念の構築へ向けて―　京都大学大学院教育学研究科紀要，**52**, 347-359.

小島弥生・太田恵子・菅原健介　(2003)．賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み　性格心理学研究，**11**(2), 86-98.

工藤頌子・金子劭榮・池上貴美子・佐々木和義　(2007)．大学生におけるアサーションと友達とのつきあい方の関連　発達心理臨床研究，**13**, 19-27.

黒木幸敏・夏野良司　(2000)．中学校学級へのアサーション・トレーニングの導入に関する研究　日本教育心理学会総会発表論文集，**42**, 198.

三田村仰・横田正夫　(2006)．アサーティブ行動阻害の要因について―対人恐怖心性からの検討　パーソナリティ研究，**15**(1), 55-57.

森川早苗　(2005)．女子がアサーションを学ぶ意味（アサーション・トレーニング―その現代的意味，アサーションを学び，実践することの意味と効果）　至文堂(編)　現代のエスプリ　至文堂 pp.89-98.

中村功　(2000)．携帯メールの人間関係　東京大学社会情報研究所(編)　日本人の情報行動 4.5.1. 東京大学出版会　Pp.285-303.

岡田努　(1995)．現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察　教育心理学研究，**43**(4), 354-363.

落合良行・佐藤有耕　(1996)．青年期における友達とのつきあい方の発達的変化　教育心理学研究，**44**(1), 55-65.

齋藤勇　(1983)．対人感情と対人欲求の関連　立正大学教養部紀要，17, 14-24.

佐々木淳・菅原健介・丹野義彦　(2001)．対人不安における自己呈示欲求について―賞賛獲得欲求と拒否回避欲求との比較から　性格心理学研究，**9**(2), 142-143.

柴橋祐子　(1998)．思春期の友人関係におけるアサーション能力育成の意義と主張性尺度研究の課題について　カウンセリング研究，**31**(1), 19-26.

柴橋祐子　(2001)．青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち　発達心理学研究，**12**(2), 123-134.

清水真由美　2007　対人状況別の賞賛獲得欲求・拒否回避欲求が対人不安に及ぼす影響　日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集，**16**, 136-137.

菅原健介　(1986)．賞賛されたい欲求と拒否され

たくない欲求―公的自意識の強い人に見られる2つの欲求について―　心理学研究，**57**(3), 134-140.

玉瀬耕治・馬場弘美　(2003)．アサーションに及ぼす場の認知の影響に関する研究　奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要，**12**, 43-50.

和田実　(1991)．対人的有能性に関する研究―ノンバーバルスキル尺度および社会的スキル尺度の作成―　実験社会心理学研究，**31**, 49-59.

渡部玲二郎　(1999)．対人関係能力と対人欲求の関係　心理学研究，**70**(2), 154-159.